

Pacifica*

知・求・人 ネットワークス

Vol.03
January 2014

www.pacific.co.jp



特集

幸せな未来への まちづくりとは。

【特別座談会】

未来へのまちづくりが震災から学ぶべきこと。



明るい未来をつくるパシコン
We add value for a bright future.

パシフィックコンサルタンツグループ株式会社
www.pcig.co.jp

パシフィックコンサルタンツ株式会社
〒206-8550 東京都多摩市関戸一丁目7番地5
www.pacific.co.jp

「Pacifica」に関するお問い合わせは pacifica@ss.pacific.co.jp



Message from Cover Illustration

南三陸町復興への思いを語った(特別座談会p11~p17)工藤真弓さん。主催する「カモメの虹色会」では、行き場を失ったカモメたちが渚に戻り、子供たちも遊べるまちを構想中。そんな幸せなまちを、かもめをモチーフに描いた。

I N D E X

2 Special Issue

特集

幸せな未来へのまちづくりとは。

4 山崎亮さんに聞く。

“幸せなまち”ってどんなまちですか？

6 パシコンのまちづくり。

- ▶ 永平寺の森と人のために、まちづくりのためにできること
- ▶ 超高齢化社会に向けた、統合ソリューションを
- ▶ 一刻も早い、インフラ施設の維持管理を!
- ▶ TOPICS & NEWS

11 Business Frontier [特別座談会]

未来へのまちづくりが震災から学ぶべきこと。



18 第2特集

東日本大震災復興支援事業への取り組み
～震災の記憶を、復興の記録へ～

26 Work Style [ダイバーシティ座談会]

みんな違っていいから面白い!

Pacifica*

Vol.03
January 2014

知・求・人ネットワークス【パシフィカ】

パシフィカとは――

私たちの社名であるパシフィックの意味は、「融和、平和、太平」。パシコンと皆さまとの「和」によって明るい未来をつくりたい、その願いを込めて名付けました。

幸せな未来への まちづくりとは。

少子高齢化や人口減少社会で、日本は変貌しつつあります。

東日本大震災で変化の加速度は増し、

人々はこれまでの価値観とは異なる「幸せ」を求め始めました。

これからのまちづくりは、どう進めばいいのか。

建設コンサルタントの歩むべき道は、どうあるべきか。

そのヒントを探るべく人々の声を聞き、被災地を訪れ、

未来のまちづくりを遠望しました。

特集
幸せな未来への
まちづくりとは
[インタビュー]
Special Issue

山崎亮さん、 “幸せなまち”って どんなまちですか？

少子高齢化と人口減少社会で、日本は変貌しつつあります。東日本大震災でこの変化は加速し、人々がかつての価値観とは異なる“幸せ”を求め始めました。今後、まちづくりはどう進むべきか。人と人をつなぐコミュニティデザインの第一人者である山崎亮さんに、“幸せなまち”について伺いました。

[人と人をつなぐコミュニティデザイナー]



山崎 亮

Ryo Yamazaki

株式会社studio-L 代表取締役
京都造形芸術大学教授
慶應義塾大学特別招聘教授

1973年愛知県生まれ。地域の課題を地域に住む人たちが解決するための「コミュニティデザイン」に携わる。まちづくりのワークショップ、住民参加型の総合計画づくり、建築やランドスケープのデザイン、市民参加型のパークマネジメントなどに関するプロジェクトが多い。「コミュニティデザイン」(学芸出版社)、「ソーシャルデザイン・アトラス」(鹿島出版会)、「コミュニティデザインの時代」(中公新書)、「まちの幸福論」(NHK出版)など著書多数。



求められるコミュニティデザイン

コミュニティデザインとは、例えば建物とか公園などハード主体の地域再興ではなく、住民自らに課題や魅力を発見してもらい、自分たちの手で解決法を考えてもらうというもので、「人と人をつなぐ」をデザインすることです。こうした仕事は行政や事業者から依頼される時代になった、つまりソフトが重視される時代になってきたわけです。

建設では幸せは担保できない

都市計画の原点は、産業革命後の英国で、コレラ撲滅のために生まれた「公衆衛生法」です。そこから建築や都市施設の基準づくりが発展しました。この公衆衛生法には「福祉」という言葉が入っていて、人々の幸福をめざすものだったわけです。その後、日本でも都市計画法とか建築基準法が輸入され、「建設によって人々の幸福を担保する」時代が長く続きました。それを支えたのは人口の増加です。

けれどももう人口は減少しはじめ、人々の価値観も変化しました。もちろん今後も建設は必要ですが、どんどんモノをつくる時代ではありません。もう建設が幸せを担保することは難しくなりました。一度原点に立ち戻ってソフト面をしっかりと問い直してみることが必要だと思います。

例えば、公衆衛生法から枝分かれして生まれた社会福祉の内容や課題について、いま建設業界の人は全然知らない状況です。ソフト面を考えるなら、建設業と社会福祉や医療、教育を改めて再統合する発想も必要でしょう。

「暮らしの主体者」としての住民

一方、これからのまちづくりやコミュニティデザインには、住民のコミットが重要になってきます。「台意形成」の先

の「主体形成」です。これまでは、あれが欲しい、こうして欲しいと陳情し、計画に反映してもらおう。お客さんになってきた。そうではなく「提案したからにはあなたも活動してくださいよ」と巻き込み、まちの担い手として育てないといけない。

例えば、現代人は生活を断片化して外注化してきたんです。冠婚葬祭も家事も子育ても教育も、専門業者に任せるから、ますます。お客さんになっていった。業者に支払うために働き、家族や地域と断絶されていく。でもやると、これって何かおかしいぞ、もう一度家庭や地域のつながりを大切にしようと思う人が増えてきました。阪神・淡路大震災や東日本大震災の経験が、この意識変化を加速させました。

「幸せなまち」とは

実際に、これからは行政がやってきたことの一部を住民が担わなければ行政が破綻します。「そうだよな。うちには確かにベランダしかないけど、公園のこの区画が自分の庭のようになるなら、毎日のように手入れに行くし、ガーデニングの仲間もできる。お客さんも案内しよう」と、生活が楽しみにならないといけない。

「できること」を他者に委ねず、生活の全体性を取り戻す。結果的に自分ひとりでは生きられないという気がつきが深まり、地域の人

と持ちつ持たれつでやっていく暮らしを取り戻していきま。人と人をつなぐを介して幸せを実感し、ここに暮らしてよかった、となっていく。これが「幸せなまち」のひとつの姿だと思っています。依存・外注する生活は、知らないうちに自分の幸せ度合いも低めていたわけです。

パソコンへの期待

パシフィックコンサルタンツ(パソコン)さんも、ソフト面への取り組みをさらに大胆に展開していけばいいなと思います。

これは提案ですが、先ほど触れたように、これからは建設コンサルタンツと社会福祉法人が別れている必要は全然ない。再統合の時代です。だから、パソコンさんの中に社会福祉課みたいなチームをつくって、いままでの建設関連のノウハウを活かして、社会福祉法人さんや保健師さんががんじがらめで解決できていないところを、めちゃくちゃ奇抜なアイデアで乗り越えていくとか。そんな可能性は十分あると思っています。

我々もまさにいま、福祉や医療、公民館の社会教育、主事の人たちとまちのソフト面の再整備や主体形成について取り組んでいます。生涯学習側からと社会福祉側からのアプローチをミックスして、さらに建設コンサルタンのノウハウを合わせていくというやり方をする人が多いんです。こういうのは、まだまだできるはずですよ。

それは例えば、建物ができた時点からメンテナンスしていくアセットマネジメントのようにつなぐことができますよ。

こんな視点でも、新時代にパソコンさんが活躍する分野はたくさんあると思います。期待しています。



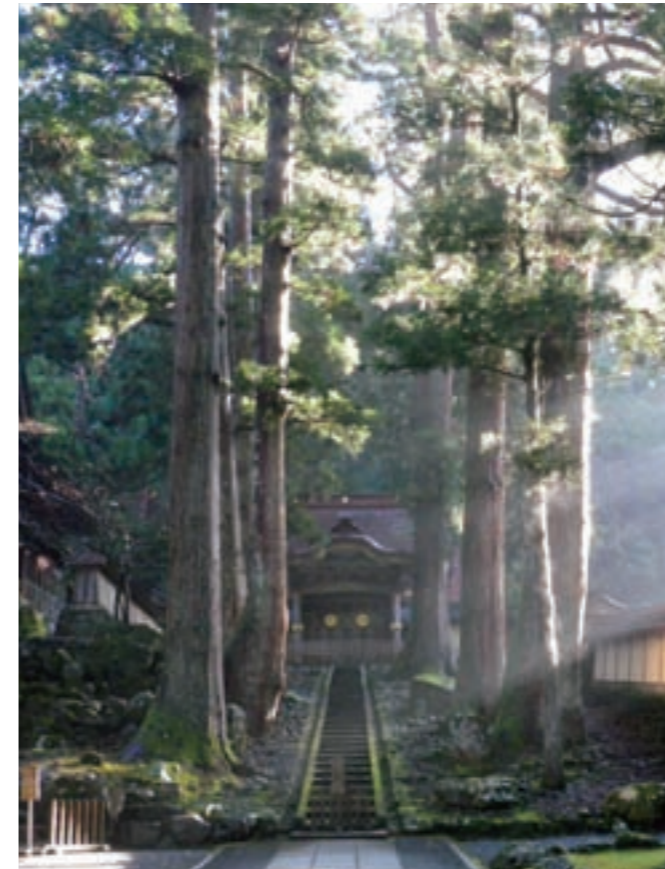
国土保全への取り組み

幸せなまちは、美しい国土が守られています。



パシコン
の
まちづくり

「永平寺の森と人のために、まちづくりのためにできること。」



▲永平寺の森が発する声を 見える化した。

阿部 今日までの約770年間、永平寺は修行道場として、有為の人材を育ててきました。人と自然が一体となり、永々とした時間を刻んできたのです。その本山の真剣な依頼に、「なんとかしなくては」と思いました。

国内でも例を見ない巨木の診断に、3種類のスペシャリストを選抜しました。まず、全国でも有数の樹木医にお集りいただきました。次に、風が木に及ぼす影響を解析するために、風の専門家に声をかけました。そして、木が依って立つ地質等の状態を知るべく、パシコンさんに登場願ったわけです。

齊藤 森林の水循環の研究で博士号を取得した直後のお話でした。ここ数年の豪雨による、山地森林域での土砂災害の頻発に対し、杉などの針葉樹人工林での表層崩壊だけでなく、広葉樹の斜面の表層崩壊、深層崩壊の発生に注目していた折の調査でした。

永平寺の森は水が豊です。でも、豊富な水は山を不安定化させ、豪雨で斜面が崩壊する危険度を高めます。平成16年の福井豪雨がここで起きたらと考えると、調査は急を要すると感じました。測量で得た地形のデジタル標高データを解析し、伽藍を囲む北側や東側の斜面に、表層崩壊の発生危険度が高いことを明らかにしました。

阿部 永平寺に限らず、寺院でこの様な調査をした例はないと思います。この「危険度マップ」は重要なツールです。森の放った異変の声を、見える化したわけですから。**齊藤** 山の成り立ちが分かったことは勿論ですが、修行僧や参拝客の安全を確保するという意味においても、有意義な情報になったのではと思っています。

▲悠久の森の時間で考える。

阿部 この調査が喫緊の防災対策だけでないことは、パシコンさんも十分に理解いただいていると思います。森を守るとは、百年単位で将来の環境まで見通すことになりますからね。

齊藤 斜面の地形解析と並行して行った杉の調査では、伽藍とその周辺の12本を樹齢500年を越えると推定しました。さらに、山門から旧龍門までのほとんどを樹齢400年以上と推定。調査対象とした杉の総本数は197本。平均樹齢は363年でした。

阿部 どの木にも長い命の営みがあります。木は人の寿命を遥かに越えた歳月を生きているので、色々な事を深く考えなくてははいけません。

齊藤 伽藍内の杉のDNAを調べたところ、国内に広く分布する天然林（青森県鯉ヶ沢・鹿児島県屋久島）と同一の遺伝子型は存在せず、ここ越前中央山地の北西を地場とする杉なのではないか。つまり五代杉の親木は、この森に生育していたと推察できます。おそらく永平寺が建つ遙か前に、古代の五代杉が、この森で最初に芽吹いたのでしょう。

阿部 確かに時間軸で考えれば、この事業の特異性が分かれますね。齊藤さんも「本山は人を育てる処」と聞かれますよね。私たちもこの事業を通じ、次の世代の技術者やコンサルタントを育てなければなりません。それにしても、発注主から人材育成まで示唆されたことは、これまでにありませんでした（笑）。でも森の時間で考えれば、確かに私達の代で終わる仕事ではありません。

齊藤 我が国の森林法には、生物多様性の観点が導入されています。いかにして生態環境豊かな森林の再生に取り組みかは、日本の森林にとって大変重要な課題です。スギ巨木のある永平寺の森を後世に残していく我々の取り組みもまた注目されるようになっていこう。

▲未来の森のために、人のために。 安全・安心なまちづくりのために。

阿部 2010年より始まった「永平寺の森保全事業」は、その成果をベースに注目すべき展開を見せています。境内の環境事業は継続させながら、伽藍の防災システムの更新と擁壁等の土木的な安心・安全事業、そして本山と門前との「まちづくり事業」、この3つの事業は「禅の里事業」として有機的に広がっています。

齊藤 最先端の技術やノウハウだけが、安全・安心を約束するものではありません。永平寺の森が美しいのは、豊かな自然と伽藍の佇まいに、人が溶け合うように暮らし、数百年も息づいている日本的な景観にあります。心の安寧は、この景観が醸し出しているに違いありません。

阿部 参拝客の漸減という現実的な問題に対しても、本山と門前の双方から森ビルとパートナーのパシコンさんに大きな期待を寄せて頂いている様に感じます。齊藤さんが言う、日本の景観の美しさが損なわれてしまわないようにと。

齊藤 自然を敬い自然を利用し、自然を残すことで人の心が潤い豊かになり、地域やまちの力が回復する。そういった、まちづくりの提案が求められているのかもしれない。

阿部 「禅の里事業」の節目は約15年後です。「まだ十分な時間があるじゃないか」とは思いません。私達の前には、解決すべき問題が山積しています。乗り越えるべきハードルも沢山あります。しかし、この様な「御縁」が出来たわけですから頑張りたいと思っています。

齊藤 「禅の里事業」に建設コンサルタント会社として、また、幸せなまちに暮らしたいと願うひとりの人間として参画できていることを、とても光栄に思っています。

修行道場として、道元禅師により開創された大本山永平寺（福井県）。2010年春、荘厳な景観をもたらす高さ50mの五大杉の一本が強風で幹折れ、鐘楼堂が半壊した。パシコンは、原因究明のための環境調査と解析業務を、森ビル株式会社様の紹介で、永平寺様から受注した。業務着手から3年、伽藍を囲む地盤の安定性や杉の健全性、生物の多様性などを明らかにした「永平寺の森 保全事業」は今、本山と門前が一体となり、未来へのまちづくりへと動き始めた。

他に例を見ない調査と広がる事業について、森ビル株式会社 都市開発本部の安部浩志部長に、お話を伺いました。



阿部 浩志

Kohshi Abe
森ビル株式会社
都市開発本部 計画統括部
計画企画部 部長



齊藤 泰久

Yasuhisa Saito
パシフィックコンサルタンツ株式会社
国土保全事業本部
地盤技術部 部長

（本対談は平成25年8月9日森ビル株式会社にて行われました。）



*スマートウェルネスシティとは

ウェルネス(健康:個人が健康かつ生きがいを持ち、安心安全で豊かな生活を営むこと)をまちづくりの中核に位置付けた、住民が健康で元気に幸せに暮らせる新しい都市モデル。現在、21府県36市町の首長が参画している「Smart Wellness City首長研究会」を組織し、研究を重ねている。

この総合コンサルティング会社の強みを、活かさない手はありません。

- 高齢者保健福祉計画の策定支援
- 医療のあり方検討や病院基本計画の策定支援
- 公共交通網の整備計画の策定支援
- 建築物のユニバーサルデザイン評価システムの構築
- 有料老人ホームのフランチャイズ事業
- 被災地における高齢者の居場所づくり

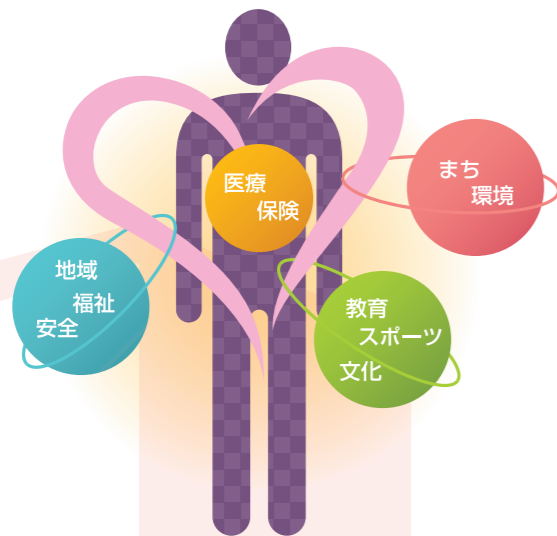
「だれもがふつうに暮らせるまちとは。」

「ふつう」という言葉に、私なりの解釈と意義を込めました。社会福祉の概念であるノーマライゼーション理念が「障害者を特別視するのではなく、社会でふつうの生活を送る条件を整えるべきであり、共に生きることこそノーマル」とすることになり、高齢者から若年層までだれもがふつうに暮らせるまちが、未来の社会に欠かせないだろうと。その人らしさが尊重され、心豊かに暮らせるまち。そんな社会なら、だれもがきつとしあわせに暮らせるのではないのでしょうか。

「だれもがふつうに暮らせるまちとは。」

「スマートウェルネスシティ」について。

筑波大学と全国の先進的な健康づくり施策に取り組んでいる複数の自治体が連携し、実施している、健康づくりをまちづくりの中核に据えた都市モデル「スマートウェルネスシティ*」に、パソコンのまちづくりのノウハウを活かしています。キャッチフレーズは「健「幸」社会の実現に向けて」。現在「歩きたくなるまちづくり」を目指し、地方自治体のまちづくりを積極的に支援しています。



「医療とまちづくりの融合。」

パソコンでは、東京都八王子市のまちの活性化と、医療周辺の健康づくりや社会復帰などの事業創出を目指されている「医療法人社団KNI」での事業化を積極

「有料老人ホーム事業の活用。」

健康医療福祉の統合ソリューションサービスの提供を目指すパソコンは、事業ノウハウを有する現場重視のコンサルタントを目指しています。例えば、当社関連会社「かぐらケアパートナーズ」の有料老人ホームやサービス付き高齢者向け住宅のフランチャイズ事業は、従来型のコンサルティング事業にとどまることなく、広範多岐な領域からソリューションを提案していく私たちのチャレンジの1つです。



ウェルネス事業への取り組み

幸せなまちは、だれもがふつうに暮らせます。

「超高齢化社会にむけた、統合ソリューションを。」



健幸都市のイメージ

出典：スマートウェルネスシティ地域活性化総合特別区域協議会

パソコンは超高齢化・人口減少社会に対応したソリューションを提供するため、事業開発本部にウェルネス室を設置。地方自治体との協働を始め、大学、医療法人、NPO法人や企業とも積極的に連携し、健康医療福祉の「統合ソリューションサービス」を推進していきます。その現状とこれからの、同室上級研究員(取材時)の飯島玲子に聞きました。



飯島 玲子

Reiko Iijima
事業開発本部 新事業部
ウェルネス室 上級研究員(2013年9月まで)
組織統制本部 人材開発部
担当次長 兼 ダイバーシティ推進室長(2013年10月より)

[特別座談会]

未来への まちづくりが 震災から 学ぶべきこと。

～被災地から「幸せな未来へのまちづくり」を考える～

東日本大震災の大惨事、とりわけ津波は多くの犠牲者を出すとともに、それまで営々と積み上げた人々の生活を一瞬にして呑みこみ、まちを被災の原野に変えてしまいました。

被災地の古来の歴史を振り返り、そして未来に目を向けるとき、私たちは震災と震災の間の日常を生きています。

安全安心の上になんか指標を持って、幸せを形づくるのか。

被災地からどれだけ多くのことを学べるか。

そのヒントを探るべく被災地となった宮城県南三陸町で座談会を行い、復興の現状や問題、解決の方向を語っていただきました。

今は静寂のまちに、震災以前のような賑わいが戻ってくることを願いながら。



※座談会は2013年7月22日に行われました。



インフラの維持管理

幸せなまちは、安全・安心な施設を提供します。

「一刻も早い、インフラの維持管理を！」

2012年12月に発生した中央自動車道笹子トンネル天井版落下事故により、日本のインフラの老朽化が一気に露呈しました。また、国土交通省の社会資本メンテナンス戦略小委員会による調査の結果、地方自治体の予算不足による維持管理の困難さが明らかになりました。さらに、今後の人口減少と財源不足が、維持管理の難しさに一層の拍車をかけるものと予想されます。

安全神話が崩壊した今、一刻も早く官民が連携した安全な施設の提供を図らなければなりません。パソコンは建設コンサルタント企業として、インフラの点検・評価、長寿命化等について、数多くの実績と経験を保有しています。また最新のICTを活用した維持管理にも積極的に取り組んでいます。

1) インフラ施設の維持管理と更新。

インフラ(道路、鉄道、橋梁、トンネル、舗装、建築、設備等)のアセットマネジメント手法を構築するとともに、マネジメントを支援するデータベース・システム等を開発しています。

2) 先端技術を活用した、インフラの点検や健全度評価。

●橋梁点検：画像計測3Dシステムの共同開発



老朽化した橋梁の健全度評価や、低コストで安全な近接目視点検技術の開発等、既存インフラの点検・評価に関する研究開発や、実務での適用に向けた提案を行っています。多視点画像計測3Dシステムでは、橋梁の寸法再現や床版点検を効率的に行うことを実現しました。

●トンネル点検：走行型トンネル点検3Dシステムの共同開発

時速60～80kmで走行し、トンネルの覆工面を計測するトンネル点検システムを計測検査株式会社と三菱電機株式会社とで共同開発。パソコンは解析技術の開発や、計測結果評価などを担当しています。



3) インフラ再構築に向けた取り組み。

パソコンが提案する未来への街づくりは、人口減少を視野に入れて慎重に進めます。例えば将来を見越したインフラ施設の再構築では、既存施設の選択と集中を行い、環境に配慮した「コンパクトシティ」などの提案にも積極的に取り組み、情報発信していきます。

広めるノウハウ、集める共感。TOPICS & NEWS!

2013NEW環境展
「国土強靱化・防災減災コーナー」に出展しました。



来場者の目を釘付けにした、3D津波避難シミュレーション

軽井沢町の夏祭り
「シクロポリタン」が人気!



CO₂排出量ゼロ!とにかくエコなシクロ。

「ものづくりNEXT↑2013」
インフラ検査・維持管理展に出展しました。



ICT技術をインフラ点検維持管理に活かした統合ソリューションサービスを紹介



未来に向けて、守るべきもの

姥浦 この座談会では、出席者の皆さんに共通の糸口として、本日ご出席の池谷監督の映画『先祖になる』を観てもらっています。読者のために、まず、その映画のテーマ、被災地での撮影で監督が感じたことなどを教えてください。

池谷 震災の1ヵ月後、被災と復興をドキュメンタリーに残そうと陸前高田市に行ったのです。三陸なんだから漁師の物語になるだろうと思っただけなのに、出会ったのはきりのお爺さんだった。直志（なおし）さんと呼びますが、行政に頼らず自分で木を伐り、その木で家を建てるというんです。「完成まで追えば、3年かかるな」と覚悟しました。が、たった1年半で建ててしまった！

撮り始めて、これは震災映画じゃないと思いました。震災がなければ出会えなかった人ですが、直志さんの中に、生きていく上で欠かせないことがぎゅっ詰まっています。頑固爺さんの物語ですが、頑固さだけではなく、なぜ土地にこだわるのかを伝えたかった。津波は人間の生命や財産だけでなく、地域の伝統や慣習、人々のつながりまで流した。直志さんは、それが我慢できなかったんです。だから、ただ住んで働くまちや家じゃなく、もっと精神的な風土、土地のDNAのように伝えられてきたものを守る、そのための再建だったんです。

姥浦 この映画は、復興やまちづくりを考える上で多くの示唆に富んでいると私も感じました。映画については折りに触れて皆さんからもご意見をお願いします。

さて次に、ここ三陸の住民の方々の思いなどを、工藤さんに教えていただきたいと思えます。

工藤 宮城県南三陸町は、50年に一度ぐらいの周期で津波の被害にあいながら、自然との共存を模索し続けてきました。今回、チリ地震の何倍もの大きさの津波に襲われ、洪水の後に露わになった被災の原野を目にして、

私たちの世代としては初めて「こういう土地、こんな地形に住んでいたんだ」とわかったんです。その上で、この土地をどういうまちに再建していくか、町民の思いをどう反映させるかを、2年半模索しています。

行政から出た計画には、歴史に学んだことが活かされていません。町民には、もっと自然を受け入れて暮らしたいという思いがあります。その上で、行政の計画とも折り合いをつけ、何を残すかを決めていかなければなりません。お爺ちゃんお婆ちゃんの話からは、南三陸で生きてきた記憶や思い出が生々しく伝わってきます。それらを丹念に集め、いくつもの懐かしい「場」を点在させ、未来の子どもたちがまちのルーツを感じられる「なつかしい未来」をつくらうと考えています。

この上山八幡宮は、もともとは低平地の防災庁舎の横にありました。それが50年前の津波で被害にあって高台に移転したのです。その教訓をもっともって伝えていくべきだったという反省が、今の活動の土台になっています。歴史に学んで未来をつくることは、未来の人々の生命につながります。この神社の神職として、一町民としても、今、頑張らなければという思いがあります。

姥浦 たしかに今回の被災では人も建物も、土地の記憶も失われてしまいました。ただ、本当にすべてが消えたわけではない。では何が残ったのか。それは例えば道の曲がり具合や土地の高低差、総体的なまちの景色かもしれません。あるいはここで遊んだという記憶なのかもしれません。こうしたことを見直していくことが復興の出发点ですね。

池谷 映画の舞台、陸前高田の気仙町には「けんかセツ」という900年も続く祭があります。これを絶やしてはいけないとみんな思い、頑張るんですが、直志さんや仲間が、若者に「今は祭を目的にするな」と言っんです。「人が戻らなければ祭は続かない。人が戻ってくるまできつかけとして祭をやれ」とけしかけたのです。映画の終盤、それが

2 工藤 真弓 Mayumi Kudo

神職、五行歌人。宮城県南三陸町出身。実家は神社・上山八幡宮。宮城大学地域連携センター復興まちづくり推進員、南三陸町志津川地区まちづくり協議会公園部会副部長、かもめの虹色会議等の活動を率いる。

3 姥浦 道生 Michio Ubaura

東北大学大学院工学研究科都市・建築学専攻准教授、工学博士。名取市と塩竈市の復興計画策定委員、宮古市と塩竈市の国交省調査監理委員、石巻市の復興まちづくり検討会議委員。

4 本間 直也 Naoya Homma

バジフィックコンサルタンツ株式会社
マネジメント事業本部 東北マネジメント事業部 地域環境政策室 課長代理

5 宮森 一郎 Ichiro Miyamori

バジフィックコンサルタンツ株式会社
マネジメント事業本部 総合プロジェクト部 地域政策室 課長代理

1 池谷 薫 Kaoru Ikeya

1958(昭和33)年、東京生まれ。同志社大学卒業後、数多くのテレビ・ドキュメンタリーを演出する。97年、運ユニバース設立。初の劇場公開作品となった『延安の娘』(02年)は文化大革命に翻弄された父娘を描き、ベルリン国際映画祭など世界30数カ国で上映され、カルロヴィ・ヴァリ国際映画祭 最優秀ドキュメンタリー映画賞ほか多数受賞。2作目の『蟻の兵隊』(06年)は中国残留日本兵の悲劇を描き、記録的なロングランヒットとなる。最新作の『先祖になる』(12年)はベルリン国際映画祭エキュメニカル賞特別賞、香港国際映画祭グランプリ、文化庁映画賞文化記録映画大賞を受賞。2008年からは立教大学現代心理学部映像身体学科の特任教授を務め(13年3月まで)、卒業制作としてプロデュースした『ちづる』(11年・赤崎正和監督)は全国規模の劇場公開を果たす。著書に『蟻の兵隊 日本兵2600人山西省残留の真相』(07年・新潮社)、『人間を撮るドキュメンタリーがうまれる瞬間(とき)』(08年・平凡社 日本エッセイスト・クラブ賞受賞)



ドキュメンタリー映画『先祖になる』

注)座談会で折々に出る「映画」はこの映画を、「直志さん」は映画の主人公・佐藤直志さんを描いています。

〈ストーリー〉
若手県陸前高田市で農林業を営む佐藤直志さんは、津波で家を壊され、長男も波にのまれた。喪失の中で彼は、浸水した土地に家を再建する決断をくだす。土地に根ざし、生きる人の行く末を思う強さと優しさが、生きるこの本質を問いかけてくる。忍びよる病魔、耐えがたい腰の痛みと闘いながら、77歳の彼は果たして夢をかええるのか――。

- ベルリン国際映画祭エキュメニカル賞特別賞受賞
- 香港国際映画祭ファイアー・バード賞(グランプリ)受賞
- 平成25年度文化庁映画賞(文化記録映画部門)大賞受賞

詳しくは「先祖になる」公式サイトをご覧ください
<http://senzoninaru.com>

若者たちの「町内会解散なんて言わないでくれ」という絶叫につながる。祭や伝統文化は、まちづくりに強い求心力を生みますね。

姥浦 伝統などのソフト部分を、まちづくりの現場でどう残していくのか。非常に難しいですね。

本間 そうですね。地方は人が減り、お年寄りばかりが増えていくわけですから、伝統文化も「守り方」を考えないと残せません。

宮森 結局、文化とは誰が担っているかであり、ここで暮らしたい！とこだわる人が日々汗を流すことで、移ろうとする人を思い留まらせる。それが、土地由来の文化の継承にもつながっていきます。復興では、安全性の観点から、住宅地の高上げや防潮堤などは避けられない対策ですが、工事期間が長くなれば土地にこだわりを持つ人が離れてしまう。ここが難しいところですね。

安全性と土地の暮らしの両立の難しさ

宮森 三陸沿岸地域には、津波の可能性やリスクを超えるだけの、土地の魅力や郷土愛があり、だからこそ先祖代々暮らしてきた経緯があります。そうした海と一緒に暮らしてきた歴史や暮らし方への配慮に欠けたまま、人命や財産を守るという理由で、巨大な防潮堤の整備を押し進めることに無理があるのです。土地に深く関わってきた人ほど、防潮堤に反対します。

一方、国や県では「どうして一部の住民は防潮堤に反対するのか?」と思う。住民の生命と財産を守るのが行政の使命ですからね、当然です。

姥浦 南三陸町では高台移転が基本ですよ。

工藤 はい。でもそれで安心かといえば、そうではないでしょう。これまで一つにまとまっていた市街地が、いくつ



南三陸町立志津川中学校からの町の全景。震災以前は商店や住宅が建ち並ぶにぎやかな町だった。

もの移転先へ分断されてしまいます。ただでさえ壊れてしまったコミュニティが、さらに分散し、孤立する人が出てきます。

かといって、みんな低地に居続けたいわけでもない。未来自の子供たちに、二度と津波の恐怖を体験させたくはないから、高台がいいと言っている人もいます。

姥浦 行政としては、国の予算がつき、大きな土木事業ができるここ数年にベストを尽くしたいと思っっているはずですが、ところが人間は、歴史や景観、生業などのトータルな枠組みの中で生きている。どこに重みを置いていくのかは、地域や住民によって様々に違うわけですね。
宮森 気仙沼でも、漁村集落では住まいを高台に移すことになりましたが、漁港周辺の防潮堤の整備については意見が分かれています。ワカメや牡蠣を採って港の周辺で干したり加工する漁業従事者の皆さんは、漁港に近接した巨大な防潮堤の整備に反対しています。一方、水産加工会社にしてみれば、数億円も投資した工場がまた津波で流されたら困るから防潮堤が欲しい。地域、人、さらに暮らし続ける手段によっても、意見は分かれます。

行政のマンパワー不足が生むもの

池谷 少なくとも、行政と住民側がもっと徹底的に話し合っていくべきでしょうね。僕が撮影で通った陸前高田市の地区でも、話し合いはまったく足りていなかった。

姥浦 100%の合意は無理でも、意見は集約したい。でも、行政のマンパワーが不足しており、住民への訪問は半年に1度程度になる。間隔が空けば住民のストレスはたまり、知らない計画に批判的にもなったりする。やはり話し合いの頻度を上げ、分かり合わなければなりませんね。

池谷 役所の方が直志さんを訪ねて「ここは浸水地域だ



主要な港の復旧は進んでいるが、小さな入り江などでは、津波の爪痕は放置されたまま。



町のいたるところで重機を目にする。

からなんとか移転を…」と言っけど、一切耳を貸さない。それでいて、最後はお互い涙ながらに手を握り合っちゃう。もともとの土地に暮らす知り合いなわけだね。何とも切ないんですよ。市の職員も、津波で随分亡くなっていて、その痛みも重々分かってる。

被災地の住人が自立したいと言っのなら、行政は話を聞くべきです。住民全員がおんぶにだっこになったら大変ですよ。行政のマンパワー不足は目に見える。だから、自立していこうという人がいるのなら、背中を押してやるべきじゃないかなあ。

依存型マインドからの脱却へ

工藤 復興に携わって気づいたのは行政依存です。説明会での住民の声は「どうしてくれるの?」「どうしてもっと早くやってくれないの!」というものが大半。行政も必至に頑張っているのに文句ばかり。これではダメなんです。私たちが行政と同じこと、それ以上のことだっつてやるべきじゃないか。自分たちで取り組まなくては、いい道は見えてこないと思っつのです。

例えば、お母さんや子どもだったら、何ができるのか。どうやったらお父さんが復興を手伝えるのかなど、テーマ毎のワークショップを開催します。気持ちを一つにして、まちづくりに結びつけるのです。その中で、「こっつして欲しい、ああして欲しい」「一辺倒だったアイデアが、「こっつしたい!ああしたい!」という能動的なものに変化し、行政の対応も変わってくるわけです。

姥浦 他の地域もそうですね。例えば、市街地が寂れたのは行政が悪いと住民は思い、行政は住民がやる気を出さないからだと思っ。これでは相互不信に陥りますよね。やっぱり「自分たちがこっつしたいから行政は協力して!」という言い方にしないと、なかなかうまくいかない



津波は南三陸町の海にそそぐいく筋もの川を遡上した。



津波の被害にあったJR気仙沼線清水浜駅。この場所を再び電車が走ることはない。

ですね。

宮森 住民は要望・陳情をして、行政は落ち度のない「正しい答」を示すというのが、これまでの図式でした。でも復興においては、絶対の正解などありません。行政は、その心の内を、もう少しオープンにしてもいいはずですよ。「市としてはこっつ思っつていますが、実はこっつと迷っつているので、ぜひ話しを聞きたい」と。

住民も行政に全部任せるんじゃなくて「自分たちでできる取り組みを考え、実践しまっしょうよ」と、互いに働きかけをしながら、お互いが徐々に歩み寄っつていくのです。

工藤 誰かに任せてしまっつまちづくりは持続しません。持続していくのは町民なんです。ワークショップでもみんない提案を出すのですが「それは誰がやるのですか?」と問っつようになっています。それはできそうかどうか、私なら何ができそうか。自主性を持つて言わないと。結局誰かに委ねることになっつてしまっつますから。

夢を描くことの大切さ

池谷 直志さんが、家を建てるっつて宣言するときに「夢」といっつ言葉を使いました。実現できなかもしれない、でも「夢」に向かっつと。辛く疲っつしい毎日だけど「夢」に向かっつんだから、ちよっつとワクワクできる。工藤さんも「夢」の思っつにあずかるっつところないですか。

工藤 私、「夢」ばかりです(笑)。行政からは計画図が一回出たきりですが、その上に、町民としての「夢」を重ねて描いていきます。行政がその絵を見てね「たしかに」「夢」も見ないとね」とっつぶやいたのは印象的でした。行政も「夢」は見たいけど立場上難しい。でも私たちには、行政の答を待っつていたら、まちから人がいなくなっつてしまっつという危機感があります。未来が見えた方が頑張れるし、ここに残りたいと思っつますよね。

石巻市の北上川河口から5kmの位置。一見、被災地とは思えないほど整地がいきとどいている。



津波は高い築堤上にある駅舎の天井にまで達した。



復興のシンボルとなった陸前高田市の奇跡の一本松と陸前高田ユースホテル。



住民の憩いの場所は姿を変えてしまった。



屹立する大型のクレーン車は、のどかな南三陸の光景に馴染まない。



八幡川の河口、本浜町で復旧の現状を目にする座談会出席者たち。

本間 行政が住民に意見を求める時は、何を期待しているのかを明確に示すべきですね。結論をくだそうとしているのか、今日は「夢」を語ってもらおう日なのかを。

工藤 説明会には、独特な空気の流れで、「夢」は語りにくい。だから、あの状況で「夢」を語れる映画の中の直志さんは素晴らしい！私も臆せず「夢」は語るべきなんだなと思いました。

池谷 こういうときこそ、一人ひとりの個の力が大切さだなんて思います。何処も同じで、出る杭は打たれるんだけど、誰かが手を挙げて動いたり、しっかりと一人ひとりが目標を持って前を向く。そういうことが大事なんでしょうね。

未来につながる 時間軸のプランニングを

姥浦 待てる人、待てない人、いろんな人がいるな。スピード感覚で復興を語っているわけですが、そのあたりについて工藤さんががでしよつ。

工藤 「復興が遅い」という言葉のもとに、「早く早く」とやっつけてくださる現実がある一方で、急いではいけな、いや、急いで考えられないという部分もあります。そこをきちんと分けていきたいというのが、地元の人間としての意見です。スピード優先でやってしまったら、被災地の歴史や防災意識がどのように伝わるのか、本場に浸透するのかが心配です。そのまちづくりが、未来の子どもたちから「ありがとう」と言われるようにすることが、私たちの責任です。

「先祖さまからつないできた命の途中の存在として自分があり、次の世代へと、また命を伝える。そのための今日として、一人ひとりができることを最大限にやっつけていくことが、未来の子どもにとっての幸せなまちなのかな」と。

そういう意識で日々を送れば、未来は全然違ってくるんだと、震災後にわかったんです。ですから無闇に焦らずにじっくり考え、10年、20年かけてできたらいいかなと。

池谷 被災地の人が何十年という時間を覚悟しているわけですから、被災地以外の人も何十年間、ずっと支える意識でいなければいけません。

本間 一方、復興交付金など、財源の問題から、急がねばならない事情があります。また住民からも早くして欲しいという声も聞こえてきます。急ぐ部分と急いではいけない部分。もしかすると、意志決定すべき人は次の世代の人かもしれません。

宮森 そうですね。防潮堤をつくれれば、息苦しい塀のようなものを次世代にまで残すことになる。つまり、今ある価値観だけで、安心なまちづくりを決めてしまっ、いいものなのかを考えるべきですね。

本間 しかも莫大な公費は、子どもや孫の世代に大きな負担を残すことになる。そういう認識の上で、いかに無駄がないものをつくっていくかという視点を持たなければなりませんね。

姥浦 安全を重視して暮らしていくまちになってしまつと、そのついで後世にまわるということですね。おっしゃる通りです。スピード感覚というだけでなく、時間軸のプランニングが、今回は特に必要なんですね。「これは次世代に任せよう」とか「ここだけは今やるよ」という、整理が重要になってくる。あるいは事業種別に考えるのではなく、エリアごとに段階的に進めていく。場合によっては将来の変更も視野にいった柔軟なプロセスまで盛り込みながら。こうした視点は、これまでの都市計画にはほとんど存在しなかった視点ですね。当然、行政にとっても、我々にとっても経験の無いことのはずです。であれば、ここから歩み始めることこそが、未来へのまちづくりの第一歩となるのではないのでしょうか。

最後になりましたが、東日本大震災は、今もなお私た



座談会が行われた上山八幡宮にて

ちに、多くの課題や問題を突きつけてきます。尽きる事無く、理想論や現実論が混じり合う中、今私たちの力是否が応でも試されています。そしてまたひとりの人間として、この震災とどのように対峙していくべきかという意思もまた、日々試されているに違いありません。

本日は大変貴重なお話をありがとうございました。

東日本大震災 復興支援事業への 取り組み

震災の記憶を、復興の記録へ

噴火や地震、津波により、
多くの祖先や築いた資産、産業までも失ってきた日本。
自然の力はあまりに強く、残念ながら勝ち目がありません。
だから是が非でも、災害時に役立つ技や方法論を見つけます。
失われた土地の大自然と向き合い、とことん考えます。
幸せな未来へのまちづくりのために。



目標達成まであとわずか。
災害がれきを資源へと
変える取り組み。

市の復興まちづくり事業の
マネジメントを支援。

自然と人、
なりわいが紡ぐまちへと、
復興する。



佐々木博明と「資源化への取り組み」

膨大な量の「がれき」を、膨大な「資源」へと変える。

釜石市の災害がれき処理は、廃棄物の徹底的な資源化で注目に値します。捨てればただのごみだけど、使えば資源。計画の根幹に「リサイクル率」を据えたのです。

では、震災廃棄物が本当に資源になるか？ 答えは、YES! コンクリートからは港湾施設やラクビー場などのリクリエーション施設の嵩上げのための埋立材に。木材はチップ化し、金属くずは地元企業等に買い上げてもらい市の収入へと。さらに80万トンの廃棄物の1/4、20万tもの津波堆積物、いわゆる海の砂は、釜石市独自の方法で木くずを取り除き盛土材として使えるように。膨大なごみは3年かけてリサイクルされ、資源となって復興に一役買ってもらいます。

パシコンは発注者の代行者として、本事業全体の管理・調整を行う監理会社です。この2年半、事業に不安な影など差さないよう、盤石の体制を敷き、問題点を明らかにし、調整を繰り返しながらゴールを目指してきました。そのゴールが見えてきました。災害廃棄物処理事業から復興事業へとバトンタッチするまで、もうあと僅かです。



佐々木 博明
Hiroaki Sasaki
三陸沿岸復興事務所
現場統括プロジェクトマネージャー



市の北部に位置する片岸町に置かれた災害がれき処理場。膨大な混合廃棄物から、リサイクル可能な木質チップやコンから、金属くずなどを選び分け、再資源化を図っていく。結果、復興資材化可能なリサイクル率は8割以上となった。



三陸沿岸復興事務所は女子力全開!

事務所を盛りたてる地元5名の女性スタッフ。そのひとり新沼房子(写真中央)は、津波で流出した遺留品をがれきの中から回収し、家族のもとに返却するプログラムにパシコンのスタッフとして参加。その模様はテレビ番組でも紹介されました。

プログラム終了後の現在は、災害がれき処理の現場で日々活躍中です。5名がみんな、地元の復興に力を注ぐべく奮闘し、三陸沿岸復興事務所の原動力となっています。



TOPICS

災害がれき処理の現場を岩手県盛岡第三高等学校が訪れました。

2013年6月に盛岡第三高等学校の「三陸実習」として行われ、生徒・職員300人が片岸町の現場を見学しました。リサイクルの流れをつぶさに見て回り、津波の凄まじい破壊力に圧倒された生徒たちですが、敷地内の最後で目にしたのは、人海戦術となる選別作業。重機だけでは済まない人の手による作業に、被災者自らが行っていると知らされ、思わず涙する生徒も。

被災地の現実を前に、防災や復興を考える貴重な契機になったと、校長先生からお礼の手紙を、そして生徒達からも多くの感想文が寄せられました。



がれき処理場の見学と併せて行われた座学で真剣に佐々木の話聞く。

伊藤元と「震災がれき処理」

推計80万トンの震災がれき。釜石市の一般生活ごみの約60年分!

市の生活ごみの約半世紀分以上という膨大な量の災害廃棄物を処理する計画の策定と実行に、パシコンが関わっています。

釜石市は、県内で唯一、建設コンサルタント会社にPMC(プロジェクト・マネジメント・コンサルティング)による事業執行の支援を要請したのです。

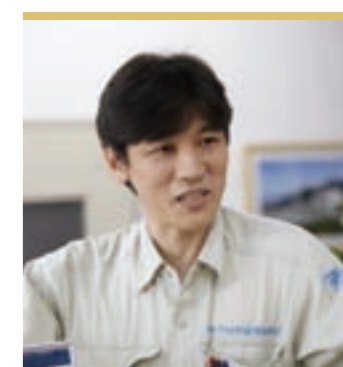
この新たな官民連携手法のPMCを導入したことにより、釜石市の災害廃棄物の処理では、事業コストと行政担当者の負荷双方を抑えるとともに地元の雇用を確保し、市の活性化を図りつつ復興につながる道筋を描きました。

この事業は「地域の復興のための基盤づくり」と位置づけられており、地元住民が戻り、復興の糸口となるよう地元企業主体の仕組みとし、解体から最終処分までのプロジェクト全体を、パシコンが総括的にマネジメントしています。

プロジェクトは順調に進んでおり、2013年9月段階で、約70%の達成率、2014年3月の完了も視野に入ってきました。



処理場内の事務所で行われる事業の進捗会議。工期約27ヶ月間の処理事業も大詰めを迎えている。



伊藤 元
Hajime Ito
三陸沿岸復興事務所
担当プロジェクトマネージャー

篠原遊二と「高台移転」

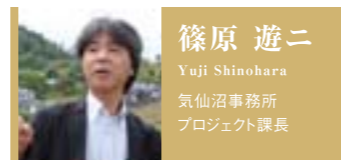
集落は一致団結して、高台移転を決意した。

海と森が暮らしに調和するまち。気仙沼市の最北端に位置する唐桑町大沢地区は、既に2010年2月に発生したチリ地震の余波でも被害を受け、その再興の過渡期にあって、追い打ちをかけるように東日本大震災に見舞われたのです。三たびの調和を取り戻すべく、住民は一つの集落を二分する形の高台移転を決意しました。

一方、唐桑町舞根地区の集落も、世帯のほとんどを津波で流失。ここもいち早く、「防災集団移転促進事業」を活用した高台移転を目指すことにしました。唐桑も舞根も、1日も早い復興を願って一致団結したのです。

気仙沼市の住宅被災棟数は1万5千棟を越え、被災集落から、高台移転を要望した地区は40カ所以上を数えます。震災後、気仙沼市では、「制度がない」、「予算がない」、「適地がない」、「人がいない」など、なにもないなかで、被災者と向き合ってきて、まもなく、全ての地区の工事が発注される予定です。

その努力を無駄にせず、大沢と舞根2つの移転候補地の造成工事を無事に終らせ、安全な暮らしの回復を1日でも早く実現しなければなりません。



篠原 遊二
Yuji Shinohara
気仙沼事務所
プロジェクト課長



高台移転予定地区では、現在急ピッチで造成工事が進められている。

気仙沼市の復興まちづくり事業に関わるマネジメントを支援。

気仙沼市の復興事業は、主に総合プロジェクト部地域政策室と開発計画室が連携して取り組んでいます。市の震災復興計画策定支援を皮切りとして、「被災地における復興まちづくり総合支援業務」等、復興まちづくりに関するマネジメント、個別復興事業の事業化等を支援しています。例えば「内湾地区復興まちづくり協議会運営支援業務」及び「内湾地区共同化事業促進・調査支援業務」では、港町の魅力を活かした賑わいと住まいの再建を目指した計画づくり、事業所・住宅の再建に向けた合意形成をサポートしています。

また、「気仙沼市被災跡地土地利用計画策定業務」、「防災集団移転促進事業等工事統括マネジメント業務」、「防災集団移転促進事業」（唐桑・舞根地区の高台移転）、「被災沿岸地域道路整備計画策定業務」、「漁業集落防災機能強化事業測量設計業務」（大沢・只越地区）などもサポートし、事業の進捗管理や関係機関との協議を密に進めています。

震災から2年半。模範解答のない復興まちづくりのあり方を悩み、模索しながら進めている気仙沼市。サポート役のパシコンも、また必死に責任を全うしています。



内湾地区では土地区画整理事業の事業化等の基盤整備の検討と並行して、共同化による事業所・住宅の再建を支援する取り組みを実施している。

宮城県気仙沼市での取り組み



気仙沼市本吉町「未知の駅 大谷海岸」付近。計画堤防の高さを記した掲示板は9.8メートルを表示している。流出・縮小した砂浜再生の担保がないまま、かつての砂浜・松林跡に計画されている巨大防潮堤に住民は反対している。

宮森一郎と「まちづくり」

海とともに生きてきたまち。生業の再建と安全の確保の間でゆれるまち。

東西にゆったり湾曲した海岸沿いに延長約2kmに及ぶ緑の松原と、遠浅な白く美しい砂浜、透明で碧い海からなる大谷水浴場は、気仙沼市内1番の入込客数を誇っていました。

東日本大震災では地震による約1mの地盤沈下、10m以上の高さの津波により砂浜や海岸林は消失し、日本一海水浴場に近しい駅で知られるJR気仙沼線「大谷海岸駅」や「道の駅大谷海岸」、内陸部の住宅・事業所の損壊・流出など甚大な被害が発生しました。

その後、高さ9.8m、幅45m、全長約1kmのコンクリート製防潮堤が海岸林跡地と残存する砂浜を覆うように計画されていることに対して、地元住民、観光事業者の皆さんから戸惑い、反対の声が出されました。

気仙沼市は防潮堤の整備による安全性の確保と海水浴場の再生の両立を目指して、パシコンに「大谷海岸集落被災地整備計画策定業務」を委託しました。砂浜の再生面積を確保するための防潮堤を内陸側にセットバックする技術的検証や関係機関協議資料の作成、道の駅をはじめとする大谷海水浴場後背の国道45号沿道にあった観光関連事業所用地の整備方策の検討などに取り組んでいます。

気仙沼市は海とともに発展してきたまちです。市民・事業者の皆さんの思いをできるだけ反映したまちづくりを実現できればと日々気持ちを引き締めて取り組んでいます。



宮森 一郎
Ichiro Miyamori
マネジメント事業本部
総合プロジェクト部
地域政策室 課長代理



「道の駅 大谷海岸」前の美しい砂浜は地震による沈降、津波による侵食・流出により姿を無くした。

Touch of Community

宮城県南三陸町での取り組み



太平洋に面し美しい景観で知られる南三陸町。津波は町のすべてを呑みこみ、被災の原野に変えてしまった。町のあちこちで重機の音が響き渡る。

幸せなまちづくりへ向けて。

被災地の復興のために、パソコンは今後も全力を尽くして参ります。

行政と被災者をつなぎ、震災の痛みが癒えるまちづくりを支援するパソコン。

私たちはこのまちに暮らし、悩みや希望を聞き、一緒に夢を見ます。防潮堤に反対の人や高台に移転したい人、砂浜の再生やお店の再開を願う人、理想論と現実論が交錯するなかで、まちづくりは進んでいきます。だれもが幸せに暮らせる、未来のまちをつくるために。



矢倉信行・千田雅明と「南三陸町」

今はまだ静寂の被災地に、まちの賑わいがもどる日。

全壊・半壊とで総世帯数の60%を超える被害を被った南三陸町。防災対策庁舎や病院などの都市機能を失った教訓を生かし、震災復興計画では「なりわいの場所は様々であっても、住まいは高台に」を基本方針にしました。

浸水の心配のない高台に、新しいまちを整備するのです。そのサポートをパソコンが行っています。計画では、まちの中心部の志津川地区に限れば3箇所、まち全体では28箇所の移転先へと分散。志津川湾へ扇状に広がる低地部のうち、八幡川左岸側を中心に商業や観光ゾーン、水産加工業などの産業ゾーンへと生まれ変わり、右岸側は復興祈念公園が整備される計画です。さらにリアス式海岸に面する多くの漁村集落でも、防潮堤の整備や高台移転事業が進められます。



矢倉 信行
Nobuyuki Yagura
南三陸町復興まちづくり支援事務所
南三陸復興室長

千田 雅明
Masaaki Chida
事業開発本部
市場開発戦略担当
シニアマネージャー

千田(写真右)は、被災直後から現地に入り、復興まちづくりの計画立案を担当。その立案された計画の事業化支援を、矢倉(写真左)が担当している。



役場から至近のパソコンのオフィスで行われる事業の進捗会議。



ダイバーシティ座談会

パシコンの職場もいまやダイバーシティ(多様化)。みんな違うから面白い？



志を持って日本に来て、日本の課題解決を仕事に

石川 まずは、なぜ日本に来たのかと、今の仕事を簡単に教えてください。

オベディ ウガンダから来ました。ウガンダはもともイギリスの植民地なので、留学希望者の多くはイギリスやアメリカに行きます。でも私は他の人と違うチャレンジがしたかったんです。そこで、日本の技術を身につけようと考え日本に来ました。仕事は、橋梁の耐震補強設計が主です。平成20-22年に設計基準が変わったため、既存橋梁の補強がさらに要求されています。その設計と施工計画に携わっています。

マイ ベトナムから日本に来た理由は二つあります。18歳になったら一人で、生まれ育ったところと違う世界に行きたいというのが夢だったんです。二つめは、高校の授業で環境問題に興味を持ったのですが、その分野が進んでいる国を調べて、日本に来ようと思った。

オベディ まだ入社3カ月(取材時)ですが、海岸保全基本計画の変更業務、海岸防護の基準の設定業務を主に担当しています。新米なので、勉強に精一杯です(笑)。

石川 みなさん、パシコンの仕事にはすんなり馴染めましたか？
オベディ やっぱ日本語の壁は厚くて、報告書や書類を書くのは苦労しました。

受け入れられている実感

石川 さすがみなさん志が高いですね。ところで、みなさんの母国には建設コンサルタント会社はあるのですか？

マイ パシコンのように総合コンサルはありません。ゼネコンと一体になって設計と施工を担当する、または専門コンサルですね。海洋関係だけが橋梁だけとかに分かれています。

デン 中国にはありますよ。ただ日本のように民間企業ではなく「官」のもので、設計院と言われています。

オベディ ウガンダはベトナムと同じく、総合コンサルはありません。橋梁専門や上下水道専門という、専門コンサル会社があります。

石川 みなさん、パシコンの仕事にはすんなり馴染めましたか？
オベディ やっぱ日本語の壁は厚くて、報告書や書類を書くのは苦労しました。

マイ 英語の苦手な日本人は多いですね。英語力は役に立つと思います。

オベディ 私の自信は語学と社交性です(笑)。特に英語はウガンダの公用語ですから任せてください。それから、若手がかもって海外出張などで異文化に触れる機会が増えるといいですよ。聞いただけ読むだけと経験するのは全然違う。ウガンダなら、うちに泊めてあげる(笑)。

デン 英語の話以外では、パシコンは歴史も技術もあるので、たくさんノウハウを持っているはずですよ。それを共有できたらいいのに、と思います。

マイ 他の部署は何が得意で、何をやっているか知りたいですね。連携して展開する事業もあるでしょうし、自分たちの自信にもつながりますよ。

石川 その話ですが、先日3年目研修があって、オベディと私も出たのですが、それぞれ何をやっているのかを理解するという研修がありました。これ、もっと発展できると感じています。みんなで会社にアピールしましょうか！

もっともっと活躍するために

石川 そのほか、どんな環境だったらもっと活躍できると思いますか？例えばもし、英語で仕事をする環境だったら？

デン はい、力を発揮できそうですね。

オベディ 日本人は摩擦が起きないように気を遣いますよね。もう少し議論

日本の仕事、「ここが」

オベディ 日本人は摩擦が起きないように気を遣いますよね。もう少し議論

デン 周りの方々が真剣に接してくれているのを感じます。業務会議の報告などでもみんなが「ここがヤバイでしょう」「ここがいいね」と指摘してくれます。そういうときは嬉しいですね。

マイ 私も打ち合せ資料を直前に先輩がチェックしてくれ「ここは違うよ、分からない点があったら早めに相談ね」と言われたりして、一人で抱え込まないこととか、失敗しながら学んでいます。

石川 教わる側に熱意があるから真剣に育てるんですよ。会社としても外国人の受け入れ体制を整えてきているんですよ。これからダイバーシティの利点が活かされていくでしょうね。

オベディ 日本人は摩擦が起きないように気を遣いますよね。もう少し議論

オベディ 日本人は摩擦が起きないように気を遣いますよね。もう少し議論



マイ ティ チュ チュイ
国土保全事業本部 港湾部
専門分野: 海岸・港湾分野
2013年入社 /
ベトナム社会主義共和国出身
●日本人のココが好き
知らない人にも親切なところ



デニス オベディ
交通基盤事業本部 構造部
専門分野: 鋼・コンクリート橋梁設計
2011年入社 /
ウガンダ共和国出身
●日本人のココが好き
すごく真面目なところ



デン フィ
国土保全本部 上下水道部
専門分野: 下水道
2012年入社 /
中華人民共和国出身
●日本人のココが好き
モノづくりが精密なところ



石川 洋介
営業統括本部
首都圏本社 事業企画部
営業職
2011年入社 / 北海道出身